長崎新聞掲載／全3段（W378×H99）

続・奇跡はある

（15）

徳永　耕一

題字・林田八郎

子ども虐待事件

結愛（ゆあ）ちゃん事件は、二〇一八年三月、起きた。

帰宅して、何気なくテレビに目をやると、流れていたニュースに目が釘づけになった。

五歳の船戸結愛（ゆあ）ちゃんが、父親に虐待され続け、母親には助けてもらえず、「おねがい。もうゆるして」と悲痛な叫びを残して亡くなったという、いわゆる「結愛ちゃん事件」だ。

「こんなことが世の中にあっていいはずがない」ニュースを見ながら、私には強い憤りがこみ上げてきた。

「幼い子どもにとって本来、最後の拠り所となるはずの家庭で、支えとなるべき家族から虐げられ、見放され、何の楽しみもなく、どこからの救いも得られないまま、わずか五年の短い命を閉じた結愛ちゃん」

私は、結愛ちゃんの無念さを思いながら、普段は朝だけしか座らない仏壇の前で、人知れず涙を流した。そして、つぶやいた。

「結愛ちゃん、ゴメンね！」

涙を流したりお詫びを言ったところで、私たちにできることは何もないが、そうせざるを得ない気持ちだった。

そして、二〇一九年一月、心愛（みあ）ちゃん事件は起きた。

年初めの忙しいある日、遅めの夕食を取りながらふとテレビに目をやると、その事件のニュースが流れてきた。

わずか十歳、小学校4年生の栗原心愛ちゃんが、父親から執拗な虐待を受けたあげく、最後のよりどころとなるべき母親からも救いの手が差し伸べられず、「たすけて、ママ、おねがい」の言葉を残して亡くなったという事件だ。

報道を見た印象として、心愛ちゃんに対する父親の仕打ちや虐待の内容は、もはやしつけのレベルではなく、殺人的レベルと言ってよかった。

私は、自宅に戻ったとき、結愛ちゃん事件のときのように再び涙した。そして、憤った。

「あまりにも不条理ではないか。なぜ、罪もない子どもがこんな目に遭わなければいけないのか」

これも印象だが、結愛ちゃん事件と心愛ちゃん事件には共通性がある。いずれも、母の再婚相手の男性が虐待の加害者だ。そして、母はその虐待を止められないだけでなく、時には加担さえしている。そしてその背景にDVがあることも共通している。

私たちは、これらの虐待について非力だが、しかしひょっとして、私たちの子ども支援活動が、「家庭のことだから放っておいてくれ」とうそぶく虐待者に対して、「子どものことについて目を光らせている者や社会がある」と思わせて、虐待をセーブする方向に働かないだろうか？

そんな思いも込めて、支援活動を続けている。

ところで、二〇二三年四月には「子ども家庭庁」がスタートする。文科省、厚労省、農水省、内閣府、そして警察庁が、今までの縦割り行政から脱皮して、力を結集して子ども行政に当たることになる。その結果、すばらしい子どもの保護育成環境が実現することを期待してやまない。

〈次回11月9日掲載予定〉

子ども食堂(バルファン)

Jisco Group

ジスコ不動産株式会社
ジスコホテル株式会社
ジスコ子ども支援株式会社

長崎県諫早市永昌町4-26
TEL 0957-27-1112　FAX 0957-26-1777